

母国の農業振興に役立つよう、アジア、アフリカ、中東の開発途上国から技術研修員13人が来県し、県内の農業普及事業を学んでいる。17日には綾川町北の県農業試験場などを訪れ、農家や消費者のニーズに合った技術・品種開発の重要性などについて理解を深めた。

国際協力機構（JICA）による2017年度の「農業普及企画管理者」研修で、開発途上国の安定した食料生産に向け、現地の行政担当者らに農業普及のノウハウを身に付けてもらうこと、毎年全国各地で実施している。香川で行うのは初めて。

県内を訪れている研修員は、フィリピン、カンボジア、パキスタン、アフガニスタン、ナイジェリアなど13カ国の計13人。16日から19日まで4日間の日程で滞在し、県内の農業普及センターや農事組合法人などを訪問。レタスの露地栽培やイチゴ「さぬき姫」のブランド化の手法などを学ぶ。

この日、県農業試験場では十鳥秀樹場長が「農

## アジア・アフリカの研修員来県

# 母国の農業普及策 学ぶ

母国の農業振興に向けた技術を学ぼうと、温室を視察する開発途上国の行政担当者ら。綾川町北の県農業試験場



### 13人、県農試など訪問

家の収入増につながる新技術・新品種の開発が試験場の重要な使命」と説明。同試験場が開発した

み換え品種は活用しているのか」などと熱心に質問していた。イラクのクルド自治政府農業普及局次長のジージョ・ナザット・ハサンさん(44)は「農家をサポートする技術や手法をしっかりと学んで帰国したい」と話していた。